

野越え山越え里へ行つた

里の帰りに何もろた

でんでん太鼓に笙の笛

赤いまんまに ととかけて

さくりさくりとくれんべいな

したから泣かねでねんねろや

2 手毬歌 やや生長すると、女の子はよく手毬歌を歌って毬つきをした。それも古くは糸毬ではずまないで、中にぜんまい綿などを入れることを工夫した。ゴム毬が流行してからは、専らこれを用いたが、糸毬の名残があったものか、損じないためにもと、毛糸であんだ蔽いを毬にかむせたりしているのを見受けた。次の手毬歌は坂内萬が、古田ゆきえ（七四歳）より採録したものである。

おえんおえん榎の木の下で、松葉長者の小娘じゃないか、下に白無垢あいだに黄（緋）無垢、上に七色の小袖を見せて、しょなりくなりと薬師に詣る。薬師坊様おかよに惚れて、おかよよく来たくれたものは、かせにかんざし、化粧の道具、まだもくれたい長崎かもじ、入れて結わせて後から見れば、たふが三尺、島田が四尺結った元結一丈二尺、おまん出て見ろ、おせん出て見ろ、やんやほうと一こ貸した。

○

お城のえ、桜のえ、おさむらい、四はお籠でいじうか、いじう様どん、どんとせ、とど神様のお屋敷は、ここは桑葉の境の城、城やひ、城やふ、城やみ……城やおで一こ貸した。

○わらべ歌